

2013年4月14日 マタイ 6:9-13「御国が来ますように」

イエス様が教えて下さった祈りのお手本としての「主の祈り」を1節ずつ読み進めています。今日は「御国が来ますように」。御国が来るとはどういうことかということが、今日の説教のポイントになるわけです。御国、違う言葉で言えば、天の国、神の国と言われます。

これは、日本語で一般的に言われるところの天国というものとは違います。日本では、仏教で言う極楽浄土という考えになんとか影響されて、だれもがなんとなく天国というものをイメージしています。だれかが死んだら、だれだれは天国に行ったんだ、天国から見守っていてくれるよ、などと言います。クリスチャンであっても、それに近い感覚を持っておられる方がいますが、少し注意が必要です。聖書が示している天の国というのは、そういう死後の世界というものではなく、この世の終わりに際して訪れる新天新地です。神がすべてにおいてすべてとなる、愛と平和と安息に満ちた世界の到来です。私たちはその時が来たら、復活します。キリストの復活の体と同じような栄光の体へとよみがえらせていただいて、その天の国の住人として永遠の喜びの中で生きるのです。それが私たちに与えられている天の国の希望です。

もちろん死んだ後の慰めということも教えられています。クリスチャンにとって死ぬというのは、卒業式のようなもので、地上の試練多い旅路の終わりでありまして、死後ただちにその魂はイエス様のもとで安らぐことができる。でもそれで終わりじゃないのですね、それはあくまで途中経過です。私たちにとっての最終的な希望と慰めの完成は、終わりの時に神がもたらして下さる天の国の到来です。先に死んだ者たちも、天の教会で私たちと共に礼拝しながら、その時の到来を待ち望んでいるのです。そして終わりの時の復活に備えているのです。

ですから私たちにとって天の国の希望というのは、単に死後の世界のふわふわした慰めというのではなくて、神がこの世界に完全な希望と慰めを満たして下さる終わりの時の新天新地到来の希望です。こういう慰めを豊かに覚えるために、改革派教会の60周年記念宣言として出された「終末の希望についての信仰の宣言」をぜひ読んでほしい。きっと皆さんは読んで下さることと思います。読んで下さると期待して、今日は少しくだいた話をしますが、皆さんはそういう新天新地を具体的にイメージしたことがあるでしょうか。黙示録などを読んでいてもあまりに幻想的で、なにかふわふわと夢物語のように感じられて具体的なイメージがもてないという方が多いのではなからうか。例えば、今、新天新地が到来し、天の国が完成したとしたらどうなるのでしょうか。この教会はどうなるのでしょうか。皆さんの家はどうなるのか。学校は、会社は・・・そんなことを、神学生時代にみんなで話しておりました。私はその当時まだ入学したばかりの1年生で、新天新地の具体的なイメージなどと考えたこともない。でも一人の先輩がこういう風に言っていたのが印象的なのです。「ぼくは、もしかすると、外面的には何も変わらないのじゃないかと思う・・・」例えばですね、まだこの教会は新しいですが、古くて壊れそうな会堂があるとします。そういう会堂が天の国が到来したからといって、ぴかっと新しいデザインの建物に変わるわけではないのではないかと。そうではなく、外面的には古ぼ

けたまま、その会堂の刻んできた歴史がそのまま大切に保存されたまま、でも内からは、これまでに考えたこともなかった輝きを放ち始めるのではないか。それはどのようにしてそうなるのかは分からないけど、聖書が示す新天新地の希望というのはそういうものではないか・・・。そんな風に、彼がその時点で持っている神学的確信を語ってくださったのです。

この考えを応用しますと、例えばこの坂井孝宏という一人のクリスチャンも、外面的には何も変化がないのかもしれませんが。私は自分の顔や体があまり好きではありませんが、これもそのまま。だってそれは神様が私にあたえてくださった大切な顔や体ですから、本来何一つ悪いものではないはず。それを嫌だと思うのは、私の罪がそう思わせているのです。あるいは人間世界全体の罪から生まれた悪いモノサシではかるから、私はだれだれに比べて鼻が低いとか、頭が悪いとか、そんなことが異常に気になってしまう。でも、それは全部、私を創ってくださった神様が、私に与えてくださったオリジナルな特別な賜物であるはず。だから、新天新地が到来しても外面的には何も変わらないかもしれません。もしかすると、ご年配の方々であれば、そのお年を召された姿のままかもしれない。だって、皆さんが刻んでこられた歴史は、神様が皆さんに与えてくださった大切な宝だから。老いるということは本来何も悪いことではないはず。だから、年齢を重ねたそのお体はそのままかもしれない。

変わるの、中身です。その神から与えられた賜物のすべてが、本来与えられていたはずの輝きを取り戻して、キラキラと輝き出すのです。罪の支配から完全に解放されるからです。この疲れた体に、想像もしたことがないような命の輝きが宿るのです。そして、私の罪の心が作りかえられます。劣等感にしばられた心が解放されます。神を愛せない自分、隣人を愛せない自分、自分を愛せない自分が完全に変えられます。だからもう、自分を嫌いになるなどということはありません。この美しくない自分の顔が、体が、この存在のすべてが愛しくて仕方なくなる。私に与えられた出会いのすべてが愛しくて仕方なくなる。神が創ってくださったこの世界が愛しくて仕方なくなる。それが、罪のない世界です。

今、私がお話していることは、聖書にはっきりこうだと示されていることではありません。もちろん聖書に基いて考えていることですが、神学的イマジネーションに満ちているものです。ただ、はっきりと聖書に書かれていることがあります。それは、終わりの時に新天新地が到来する時には、地上にのさばるサタンの支配が完全に打ち破られて、私たちは完全に罪から自由にされた命を生きるようになるということです。

皆さんも経験があることと思います。日曜日の礼拝などで受け取った御言葉の慰めが、本当に体のすみずみにしみてきて、霊的な力がみなぎってくる。これまでと同じ景色なのに、すべてが新しくキラキラして見える。そして、今まで心を支配していたイライラした思い、オロオロした不安がどこかに行ってしまうと、その日出会ったすべての人が愛しくて仕方ない、イエス様のように愛そうと、すごく自然に思える・・・。でも、そんなキラキラした時間が、一週間ももたずに元に戻ってしまう。まるで魔法が解けたみたいに。昨日はかっこよく思えたご主人の顔も、嫌で仕方ない。この仕事を与えられているのは感謝だとしみじみ思えたのに、し

んどい、こんな毎日つらくて仕方がない・・・。年老いて病み衰えていく自分のことが、惨めで仕方なく思えてくる・・・。残念ながら私たちは、この古い世界に生きるあいだ、そんなことを繰り返すのです。それは、私たちが依然として罪に縛られているからです。サタンの攻撃にさらされているからです。

でも、終わりの時に、神が新しい天と地をもたらしてくださるその時には、罪のない世界が始まるのです。あのキラキラした日々が、まるで天の国の喜びを垣間見たような、神の愛に満たされたあの日々が永遠に続くのです。それは私だけではありません。私たちみんながそのようにされるのです。この世界のすべてが、そのように輝き出すのです。そこではもう、互いに傷つけあう必要もありません、奪い合い、貶めあう必要もありません。すべての人が、神の愛に心満たされているからです。争いもない、貧困もない、病もない、死の恐怖もない、すべての涙がぬぐわれて、みなで心をつ一つにしてイエス・キリストの父なる神を賛美して生きるのです。そんな新しい天と地を、神は必ずもたらしてくださる。イエスを信じる者は、栄光の体へとよみがえって、そういう世界の一員として招き入れられて、永遠の喜びと安息に生きることになるのです。それが、私たちに与えられている、天の国の希望です。

皆さんには、どうかこのようにして、天の国の希望を、できるだけ具体的にイメージしてほしいのです。それが、今の私たちを支えるからです。今お話ししたような「天の国」の希望、また「永遠の命」の希望、それはキリストを信じる者に与えられると約束されていることです。私たちが最後どういうものになるとされているか、この世界がどういうものになるとされているか。それは約束であって、まだ実現しておりません。でも必ず実現すると言う神の約束であり、その約束に向かって世界の再創造はすでにはじまっているのだと、イエス様は教えてくださいます。私たちはその今に生きているのです。約束の栄光の未来にむかって変わりつつある今を生きているのです。

私たちはそういう完成に向かっていて、というよりも、完成の方から引っ張られているような存在です。終わりの時の希望にひっぱられながら、イエス様の約束にひっぱられながら生きているのが、今を生きる私たちです。そういう意味で、神様から見ると、私たちは常に右肩上がりをつけて、希望へ希望へと向かっているのです。皆さんにぜひ覚えていただきたいのは、そのようにして、神が用意してくださるゴールのすばらしさから、今の世界を見るということです。未来の完成の姿から、今の自分を見るということです。

今の自分自身を見つめる時に、希望などどこにも見出すことはできないという方がいらっしゃるでしょう。いつまで続くのか分からない苦しみの日々に、疲れ切っておられる方がいらっしゃると思います。こんなに苦しい日々が続くのなら、いっそ死なせてほしい、楽になりたいと思っておられる方もいるかもしれません。私は小さいころから、生きていくということがつらいものに思えて仕方ありませんでした。以前にもお話ししたと思いますが、幼稚園の時に、これから小学校、中学校と成長して行って、やがて大人になって、お父さんのようにがんばって

働かなきゃいけないのは、本当につらいなと考えていたことを、はっきりと記憶しています。生きるのはつらいことです。日本のことや世界全体を視野に入れて考えても、とても良い方向に向かっているとは思えない、実際今はそういう時代です。放射能、戦争の気配、資源の枯渇も近づいている。もうだめだと言いたくなるのです。でも、この世界を罪から完全に自由にするという、神の再創造は、すでにイエス・キリストの十字架と復活において決定的な仕方ではじまっているのです。必ず、約束された完成が訪れます。私たちの世界は、その希望のゴールへと向かっています。だからどれだけ今の私がダメであろうと、今の世界がダメであろうと、神の大いなるご計画と御配剤の中で、すべては終わりの時の完成に向かって用いられます。そういう自分たちのすべてが、内側から輝き出す時が必ず来るのです。神がその時を来たらせてくださるのです。そう言う意味で、どんな時も右肩上がりの線を描いているのが私たちです。そう信じることができるから、今日もふんばろうって思えるのです。だってハッピーエンドが約束されているからです。どんなにへこんでいる時だって、私たちの物語は、最後は必ずハッピーエンドで終わるって決まっているんだから、だからどんな時も希望を失わないで、耐え忍ぶことができるのです。

これは、とっても大事なことです。熊本にいた時、ある求道者の方とこんな話をしましたら、そういう考え方ははじめて聞いたと言われました。すでに約束されている栄光に規定されて、勝利に規定されて現在を生きる。必ず希望に向かう、最後はハッピーエンドで終わると強く確信して現在を生きる、それが終末の希望に支えられるということです。そして、これは世の人々が聞いたことのない福音です。プラス思考という言葉をあえて使うならば、究極のプラス思考です。それは強がりではない。夢物語でもない。神の約束に支えられたプラス思考です。

そういう確信を得ながら、伸びやかに生きる。そして確信の中で祈って待つのです。神の定められた時を待つ、神が新しい天と地をもたらしてくださる時を辛抱強く祈り続け、サタンとの戦いを戦い続ける。この世の罪と自分の罪と戦い続ける。祈って祈って祈って戦い続ける。それが「御国が来ますように」という祈りの姿勢です。

ある先生は言いました。ここに一つの家があると考えてください。家を包む世界には、実はもう朝が来ています。朝の光がもうすでに家を照らしています。でも家に住む人の大半は、まだ朝が来ていることを知らずにまだ闇が続いていると思って、眠っています。この夜はいつまで続くのかと、もう時計を確認することにも疲れてしまって、このまま眠り続けていようと思っています。それは厚いカーテンが光をさえぎっているからです。でも、その家の中に、たった一人だけ、朝がもう来たことを知っている者がいます。この長い長い夜は、もう終わろうとしています。この分厚いカーテンが開きさえすれば、光という光が輝いて、すべてを新しくするのです。だから、圧倒的な闇の中にあっても、彼は目覚めて待っています。必ず、このカーテンが開けられる時が来るのを信じて、祈って待っています。その人こそ、私たちであるべきです。

「御国が来ますように」とは、そうして目覚めている者たちのために与えられた祈りの言葉です。決して希望を失わず、祈って御国を待ちなさいとイエス様は招いておられます。だから、懸命に祈りましょう。そして、カーテンを開けようと努めましょう。この分厚いカーテンは、決して私たちの力では開くことはできません。でも、その私たちの闇との戦いの向こうに、新しい朝が空け染めます。神が、私たちの祈りを通して、御国を来たらせてくださいます。